慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	楊柳續考 : 信仰から別離の象徴へ
Sub Title	Further observations on the willow : from religious belief to the symbol of farewell
Author	許, 曼麗(Hsu, Man-Li)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.91- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊柳續考

――信仰から別離の象徴へ――

許　曼　麗

序　言

以前、楊柳に関する民俗をとりあげて、一つの小論(1)をまとめたことがある。その中で、楊柳は古くから辟邪、予祝、依り木など、民間信仰の祭りの道具として、よく登場することを指摘した。その祭りの道具である楊柳は、中国人の生活に深く関わったばかりでなく、実は詩歌の中でも、最も多く詠まれた素材の一つとして、人々に親しまれて来た。数多い楊柳詩には、様々な楊柳の姿が描かれているが、そのほとんどが人の悲しみを誘い、また、遊子望郷の情や、空閨を守る女性の涙をそそる姿である。

閨中少婦不知愁　閨中の少婦　愁を知らず
春日凝粧上翠樓　春日　粧を凝らして翠楼に上る

忽見陌頭楊柳色　忽ち見る　陌頭楊柳の色
悔教夫婿覓封侯　悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓め教めしを

王昌齢の「閨怨」である。どうして不知愁の年若い妻が芽をふく楊柳の色を見た途端に、夫に立派な地位を求めるようにせがんだことを後悔するのだろうか。楊柳が芽をふくことは、時の流れ、夫と離ればなれになった寂しさなどを意識させる。ここで王昌齢が楊柳を使ったのは、楊柳について、詩人たちが共通して持っているイメージの存在を前提にするからである。楊柳すなわち別れ、である。千古の絶唱とされる王維の「送元二使安西」もそうである。二句目「客舎青青柳色新」の柳色新をただの景色として見る人はいないだろう。柳が別れの哀情を一層掻き立てるための素材として働いている所にこそ詩人の眼目がある。

送韓揆之西江　李季蘭
相看指楊柳　相看て楊柳を指し
別恨轉依依　別恨　転た依々たり
萬里西江水　萬里　西江の水
孤舟何處歸　孤舟　何(いず)れの處にか歸らん
（下略）

別れが辛ければ辛いほど言葉は少なくなる。その沈黙の中に、別れの時刻が迫ってくるにつれて、悲しみや恨みは膨んでいく。そして、哀愁が漂い充ちた時、二人の目に入ったのが楊柳樹である。その楊柳を見、送る人も送られる人も同じ気持になる。楊柳はすべてを語ってくれると。前掲の詩の最初の二句をこのように理解して間違いはないだろう。

孟東野には「古別離」と言う詩作がある。その中に「楊柳識別愁、千條萬條絲」と書かれている。楊柳は存在するだけで、自ずと一抹の哀愁が周囲に充満する。このような性格を持っているからこそ、繰り返し、繰り返し、詩人の手によって演出される。

さて、楊柳はどうして別離の象徴となったのか。楽府「折楊柳」の存在がどれだけ影響したのか。

春夜洛城聞笛　　李白

誰家玉笛暗飛声　　誰が家の玉笛ぞ　暗に声を飛す
散入春風満洛城　　散じて春に入って洛城に満つ
此夜曲中聞折柳　　此の夜　曲中　折柳を聞く
何人不起故園情　　何人か起こさざらん故園の情

家族と別れる哀しさ、望郷の情、すべてこの「折柳」（折楊柳）と言う曲によって掻き立てられたと言う。「折楊柳」が別離の楽府題であることは説明するまでもない。

しかし「折楊柳」も最初から別離の歌ではなかったようである。いったい「折楊柳」はいつから別離の歌になったのか。また、送別詩の柳について説明するとき、よく持ち出される民間風習「折柳贈別」の実体は如何なるものなのか。本稿は以上の問題点を念頭に、古い時代から詠まれた「折楊柳」と詩経からの柳詩及びわずかながら、経書に出ている柳を拾いあげて検討し、試みて自分なりの結論をまとめたものである。

一

一言に楊柳と言っても、実は楊と柳とは違う植物である。

本草綱目李時珍曰、楊枝硬而揚起、故謂之楊。柳枝弱而垂流、故謂之柳。蓋一類二種也。(中略)又爾雅云、楊、蒲柳也。旄、澤柳也。檉、河柳也。觀此、則楊可稱柳、柳亦可稱楊、故今南人猶併稱楊柳。

とあるのを見れば、楊と柳とは全く外見の違う植物である。しかし、根本的には同類の植物として扱われたのがわかる。このような混淆は、李時珍から始まったのではない。『説文解字』に

楊、蒲柳也。柳、少楊也。

とある。すくなくとも東漢から、楊も柳も類似したものと見られたことが言える。このほか、澤柳、河柳、水楊なども同類と目されたのである。ところが、植物学の分類によると、これらの植物は、すべて楊柳科のものではない。中にはポプラ科のものもある。例えば、楊樹或いは白楊と称する場合、ポプラ科の植物である可能性が非常に高い。李時珍が言う「枝硬而揚起」の楊は、果して蒲柳のことを指しているのかが疑問である。植物学的考察(2)はさておいて、ここで指摘したいのは、一般に言う柳とは、一種類の植物ではなく、一群の類似した習性、外見、或いは類似した名前を持つ植物と言うことである。しかし、これが詩歌に登場すると、柳、楊柳、垂柳、又は垂楊でも、いずれも垂れる姿を持つ柳をさすのが普通である。従って、本稿の第二、三節に言う楊柳は、この垂れる柳をさす。

さて、この楊と柳であるが、古代ではどのように人の生活と関わったかを見てみよう。

柳の字義を調べると、いくつか気になる所がある。まず、葬式との関係である。

周禮、天官、縫人、喪縫棺飾焉。衣翣柳之材。注云、必先纒衣其木、乃以張飾也。柳之言聚、諸飾之所聚。書曰、分命和仲度西曰柳穀。故書翣柳作接櫍。鄭司農云、接讀為櫍、刃刃疋讀為柳、皆棺飾。疏曰、柳即上注、引喪大記、帷荒是也。

(周禮、天官、縫人、喪には棺の飾を縫ふ、翣柳の材に衣(キヌキ)す。注、必ず先ず其の木に纏衣して、乃ち以て、飾を張るなり。柳の言は聚なり、諸飾の聚まる所なり。書に分かちて和仲に命じて西に度らしめ柳穀と曰ふ、と。故書、翣柳を接櫍(しようりゆう)に作る。鄭司農云う、接を読みて刃疋(そう)と為す。櫍は読みて柳と為す。皆、棺の飾なり。)(3)

同じく鄭玄が禮記、喪大記の注に言う、

飾棺者、以華道路及壙中、不欲衆悪其親也。荒、蒙也。在旁曰帷、在上曰荒、皆所以衣柳也。(中略)。柳象宮室、懸池於荒之爪端、若承霤然。

(棺を飾る者は、以て道路及壙中を華にし、衆の其の親を悪むを欲せざればなり。荒は蒙なり。旁に在るを帷と曰ひ、上に在るを荒と曰ふ。皆柳に衣する所以なり。(中略)。柳は宮室に象る。池を荒の爪端に懸く。承霤の若く然り(と云ふ)。)

また、『釋名』釋喪制に、

輿棺之車曰轜。(中略)。其盖曰柳。柳、聚也、衆飾所聚。亦其形僂也。亦曰鼈甲、以鼈壓亦然也。

(輿棺の車を轜と曰ふ。(中略)。其の蓋を柳と曰ふ。柳は聚なり。衆飾の聚まる所、亦た其の形、僂なり。亦た鼈甲と曰ふ。鼈を以て圧するも亦た然りなり。)

とがある。さらに、『禮記』檀弓篇上「蓋殯也」について「殯引飾棺以輤、葬引飾棺以柳翣」（殯の引（ひきづな）は棺を飾るに輤を以てし、葬の引は棺を飾るに柳翣を以てす）と注を付されている。柳は棺の飾り或いは覆いのようなものと理解されている。柳車と言う語がある。『三禮圖』の喪器、柳車の所「柳車名有四、殯謂之輤車、葬謂之柳車。下略」つまり、柳車は葬式に用いる車である。以上に述べた柳に関する記載に拠ったと見られるものに、陸士衡の挽歌詩に「龍幠被廣柳」と言う句がある。

柳穀或いは柳谷と言うのがある。『周禮』天官縫人の「衣翣柳之材」の疏に次のような説明がある。

柳之言聚、諸飾之所聚者。（中略）。柳者、諸色所聚、曰將没其色赤、兼有餘色、故云柳穀。
（柳の言は聚、諸飾の聚まる所。（中略）。柳は諸色の聚まる所、日將に没せんとするに、其の色赤兼ねるに余色有り、故に柳穀と曰ふ。）

柳穀はまた昧谷、虞淵とも言う。『古文尚書』(4)に「分命和仲宅西、曰昧谷」（分かちて和仲に命じて西に宅らしめ、昧谷と曰ふ。）とあり、その注には「昧、冥也。日入於谷而天下冥、故曰昧谷」（昧は冥なり。日、谷に入りて天下冥なり。故に昧谷と曰ふ。）とある。『山海經』大荒北經「夸父不量力、欲追日景、逮之于禺谷……」（夸父は力を量らず、日景を追わんと欲し、之に禺谷に逮ぶも……）とあるところ、郭璞が注に「禺淵、日所入也、今作虞」と言っている。要するに、柳穀、昧谷、又は虞淵など、すべて太陽の沈む所を指す。日没は人間の死を連想しやすい。と同時に、落日の場所は人間が死後行くところだと考えがちなのである。葬式の一道具にしても、日の沈む所にしても、柳と言う植物とどれだけ直接的な関係があるかが定かではないが、すくなくとも柳と言う形（あるいは音(5)も含まれたかも知れない）が、死を連想しやすいものであったことは、以上の叙述を通して明白である。

植物としての柳、楊も同じであるが、これもまた死と関係している。段玉裁が『説文解字』「天子樹松、諸侯柏、大夫欒、士楊」の所に注して曰、

士楊二字當作士槐庶人楊五字、轉寫奪去也。（中略）庶人無墳、樹以楊柳。下略。
（士楊の二字、当に「士槐庶人楊」の五字に作るべし。轉寫して奪去するなり。庶人に墳無くんば樹うるに楊柳を以てす。）

つまり、古代の一般庶民のはかは盛り土を施さない墓であって、そこに目じるしとして植える木は楊、柳と定められていたのである。すると、楊、柳を見かけると、その下には死者があり、死者とは黄泉の国とつながっているものであって、人々は、或いは死者、或いは死、さらに黄泉と色々思いをめぐらせるのであろう。

豫章行　漢　無名氏
白楊初生時　白楊　初めて生ふる時
乃在豫章上　乃ち豫章の山に在り
上葉拂青雲　上葉　青雲を払い
下根通黄泉　下根　黄泉に通ず
〈下略〉

古詩十九首　無名氏
驅車上東門　車を上東門に驅りて
遙望郭北墓　遙かに郭北の墓を望む
白楊何蕭蕭　白楊　何ぞ蕭蕭たる
松栢夾廣路　松柏　廣路を夾む

下有陳死人　下に陳死の人有り
杳杳即長暮　杳杳として長暮に即く
〈下略〉

古詩十九首　無名氏

去者日以疎　去る者は日に以て疎まれ
生者日以親　生ける者は日に以て親しまる
出郭門直視　郭門を出でて直ちに視れば
但見丘與墳　但見る　丘と墳とを
古墓犂為田　古墓は犂かれて田と為り
松柏摧為薪　松柏は　摧かれて薪と為る
白楊多悲風　白楊に　悲風多く
蕭蕭愁殺人　蕭蕭として人を愁殺す
思還故里閭　故の里閭に還らんと思ひ
欲歸道無因　歸らんと欲するも道の因べき無し

楊樹も柳樹も、詩人の目から見ると、まさに傷心の木であると言えよう。

「楊柳小考」(6)の中ですでに触れたが、柳は形態の上でも、習性の上でも、古代人に信仰の象徴或いは道具として崇められたのである。再生力の強い植物である上、さらに、墓の木として定められたのならば、およそ木の中で、人々に独特の感情を与えつつ、最も深く生活に浸みこむ木であることは否定出来ないだろう。

信仰の木、或いは死を意識させる木、更にその木自身が持つ強い生命力、このような特長から、いったい後々の世

に、楊柳が別離の象徴となったのと直接に関係があったのだろうか。あるとすれば、どのような過程を経って来たのか。そのあたりには、まだはっきりした根拠が見あたらないが、以上述べて来た楊と柳が象徴する日没、死、黄泉、そして再生するなどは、非常に大切な背景になったに違いはあるまい。また、その背景があってこそ、極めて自然に、人人は楊柳に別離のイメージを重ねあわせるようになったのではなかろうか(7)。

二

「折楊柳」とは楊柳の枝を手折ることを意味する。その枝を手折って、何を表現しようとしたのか。それは別れのしるしであり、「折楊柳」は別れの歌であると一般に言われている。梁陳の頃、夥しく詠まれた横吹曲「折楊柳」だけを取りあげて見ると、確かに「折楊柳」が別れの歌であることが頷ける。梁陳以降、唐代を経て、今日に至るまで、それが常識でもあった。その根拠として、通常持ち出されるのは、漢人の著とされる『三輔黄圖』である。

霸橋在長安東、跨水作橋、漢人送客至此、折柳贈別。

しかし、清人孫星衍はこの本を校勘するとき「(橋)以下十一字後人妄加、今削去」とした。そこで、この折柳贈別の風習が漢からあったかどうかは疑われてくる。実際、梁陳以前の作品を検討すると、必ずしもこのような風習が見出せるとは言えないし、柳を詠む賦を見ても、別離とはほとんど無関係である。郭茂倩の輯なる『楽府詩集』によると、「折楊柳」は漢の李延年が制作した横吹曲(8)である。しかし、漢代の曲辭は伝わっていない。従って、漢代に制作された当時の曲名と題意とはどのような関連(9)があったのかは定かではないし、離別歌であるかどうかも当然判断出来ない。

『楽府詩集』には「折楊柳」のほか、「折楊柳行」「折楊柳歌」「月節折楊柳歌」「折楊柳枝歌」「攀楊枝」など類似した歌題が見られる。それらの曲辭を見ると、時代時代によって、また北方か南方かによって、主題が大きく違っていることがわかる。以下は便宜上、1漢魏晉の折楊柳行、2北朝の折楊柳歌、3南朝の民歌、4梁陳朝の横吹曲折楊柳、と四つに分けて、曲辭の主題を見ることにしよう。

1　漢魏晉の折楊柳行　全部で六首を数えることが出来る。題名はいずれも折楊柳行であり、五言となっているが、句数は違うし、内容もそれぞれ独自のものを持っている。時代の順に整理すると、作者、句数、主題は次のようになる。

(1)古辭、無名氏　18句　(詠史勧戒)
(2)孔融　16句　辭世(勧戒)
(3)魏文帝曹丕　24句　遊仙(勧戒)
(4)陸機　20句　述懐
(5)謝霊運　12句　述懐
(6)謝霊運　14句　別離

まず、(1)の古辭は、桀、紂、胡亥、夫差など、忠臣の諫言を無視した昏君が自業自得の最期を遂げる史実が並べられる詠史詩であり、「借古諷今」の要素が見られる。(2)の作品は、近人逯欽立が輯校した『先秦漢魏晉南北朝詩』に拠って、取りあげたものである(10)。逯本には題名の「臨終詩」に続いて、「書鈔作折楊柳行」と記されている。折楊柳のメロディーにのせて書いたのだろうか。全体に、大きな害は、往々にして些細なことに由来する、正は往々にして邪に勝た

ず、と言うようなことを延々と述べ、自分の忠誠心が空回りした虚しさが漂っている。死に臨むとき特有の、一種の投げやり調が浸みでているが、ある意味では、勧戒とも言える。(3)では、文帝が西山の仙童にもらった霊薬を服用し、四海に浮遊したが、行くべき道がわからない。結局は「百家多迂怪、聖道我所観」と嘆くに終っている。最後の六句は勧戒の意図をも伺える。(4)と(5)はいずれも不遇を歌い、人生の空しさに感慨する。(6)について、逯欽立氏は書鈔、白帖に依って、謝霊運の作ではなく、魏文帝の詩作だとしている。その題は「見挽船士兄弟辭別詩」となっている。確かに、内容を見ると、文帝詩の題の方がより相応しいが、いずれの作にせよ、この作品では漢の「折楊柳」が離別歌であることを証明することが出来ない。この六首のいずれにも歌詞に「折楊柳」、又はそれらしい動作を見ることが出来ないし題意と内容との間に密接した関連性も見出せない。同じメロディーの替え歌のようなもので、たまたま(6)のような別離を歌ったものもあったぐらいの理解しか得ることが出来ない。

2　北朝の折楊柳歌　『楽府詩集』にまた梁鼓角横吹曲と称する北歌がある。折楊柳歌辭五首、折楊柳枝歌四首が含まれており、すべてが詠人不知である。

折楊柳歌辭

1 上馬不捉鞭、反折楊柳枝、蹀座吹長笛、愁殺行客人。
2 腹中愁不楽、願作郎馬鞭、出入擐郎臂、蹀座郎膝邊。
3 放馬兩泉澤、忘不著連羈、擔鞍逐馬走、何得見馬騎。
4 遙看孟津河、楊柳鬱婆娑、我是虜家兒、不解漢兒歌。
5 健兒須快馬、快馬須健兒、跽跋黄塵下、然後別雌雄。

折楊柳枝歌

6 上馬不捉鞭、反拗楊柳枝、下馬吹長笛、愁殺行客兒。
7 門前一株棗、歳歳不知老、阿婆不嫁女、那得孫兒抱。
8 敕敕何力力、女子臨窗織、不聞機杼聲、只聞女歎息。
9 問女何所思、問女何所憶、阿婆許嫁女、今年無消息。

この九首の歌はすべて五言四句となっているので、魏晉の折楊柳歌行の調べとは違うものであると思われる。1、6番歌は行客の愁いを歌い、2番歌は女性が出掛けて行く男性に別れ難い気持を詠んでいる。3、4、5番歌は北方男児のたくましい様を歌にしている。健児と快馬、草原を駆けめぐる姿はいかにも雄々しい。7、8、9番歌は一変して、女性が嫁に行きたいと家族を促す歌となる。まわりくどくなく、純粋な気持を表わす素朴な歌である。九首ともわかりやすい言葉で綴られているが、とくに楊柳を手折ることと関連するとは見られない。曲名は一首目の「上馬不捉鞭、反折楊柳枝」から来ていると思われる。一種の「瞩目発想」と思うが、楊柳枝を鞭の代りに使おうとして折るあたりは、馬に馴れている北方民族だからこそ出る発想である。「行客の愁」「牧歌」「閨思」など、易しい言葉で表現しているが、趣きがあって、面白い歌の一群である。しかし、折楊柳すなわち別離と言った趣向は、この一群の歌からは特に見出せないようである。

3 南朝の民歌 宋より梁にかけて、南方では「月節折楊柳歌」と言う季節の風物を織りこんだ男女の愛を托す歌が流行した。一月から十二月、閏月も加えて、全部で十三首がある。その一部を見ることにしよう。

四月歌

芙蓉始懐蓮　芙蓉　始めて蓮を懐くも
何處覓同心　何れの處にか同心を覓めん
俱生世尊前　俱に世尊の前に生まれ
折楊柳　〻折楊柳
捻香散名花　香を捻じて名花を散じ
志得長相取　志して長く相取るを得ん

七月歌

織女遊河邊、牽牛顧自歎、一會復周年、折楊柳、攬結長命草、同心不相負。

十月歌

大樹轉蕭索、天陰不作雨、嚴霜半夜落、折楊柳、林中與松柏、歲寒不相負。

閏月歌

成閏暑與寒、春秋補小月、念子無時閒、折楊柳、陰陽推我去、那得有定主。

（右三首は歌の形式を示すために掲げたもので、読み下した文を省略する。）

十三首が全部右のように五言三句と五言二句との間に、折楊柳と言う三文字が入っている。前の五言三句が季節の景色風物を描き、後の男女の、或いは情愛、或いは誓い、或いは相思などを引き出す。間の折楊柳は前の叙景が後の抒情に変るときの転折套語である。一種のハヤシ言葉とも見られるが、実はこの折楊柳こそ意味深い存在と考えなければならない。単にハヤシ言葉が必要であるとすれば、無意味なあて字でも良いのではないか。やはり、歌意の転折として働かせるのが眼目であり、折楊柳にはすでに、一つの歌い手も聞き手も知っている共通のイメージがあったからこそ使われ

たのだと考える方が自然だろう。

攀楊枝

自從別君来　君に別れてよりこのかた
不復著綾羅　ふたたび綾羅を著ず
畫眉不注口　眉を畫くも口に注けず
施朱當奈何　朱を施すともまさにいかんすべき

恋焦がれる人と別れ別れになった女性のけだるさを見事に表現している歌である。ところが、別れの歌の題名がどうして「攀楊枝」なのか、楊枝を攀って、何をしたのか。

正月十五日、作豆糜加油膏其上、以祠門戸。先以楊枝插門、隨楊枝所指、仍以酒脯飲食及豆粥插箸而祭之。
梁　宗懍『荆楚歳時記』

（正月十五日、豆糜を作り、油膏を其の上に加え、以て門戸を祠る。先ず楊枝を以て門上に插み、楊枝の指す所に隨い、仍に酒脯飲食及び豆粥を以て箸を插み、これを祭る。）

攀楊枝の男女も、このように楊枝で二人の恋の行方を占ったのか。或いは二人の変らぬ気持の証として、相手に贈ったのだろうか。いずれにしても、攀楊枝が無意味な行動であるとは思えないのである。このように考えると、「月節折楊柳歌」の中の折楊柳は、決して、他の歌詞では取って代ることの出来ないものと見えてくるのである。

4　梁陳の横吹曲「折楊柳」

民間では男女の情愛を歌う「月節折楊柳歌」が流行した一方、文人の手による楽府「折

楊柳」も盛んに制作されたのである。梁朝の簡文帝、元帝及び陳後主がこよなく横吹曲を愛したがために、臣下もそれに惹かれて、競って新辭を作ったのである。またこの時代、文人の間に相和と言う風潮が盛んだったので、楽府詩もその対象として例外ではなかったのである。そこで、梁陳には大量の横吹曲新辭が制作されたと言われる(11)。この時代、新しく名づけられた曲題もあれば、古い時代の曲名をすこし手直したものもある(12)。そのほとんどが題名と曲辭とが非常に密接な関連を持たされ、制作されたのである。折楊柳もそのような流れの中で、新しいイメージを付与されたのであろう。題名こそ古くからあったとは言え、曲辭と題名との関連性は必ずしも密接だとは言えなかったし、諷刺なのか、述懐なのか、遊仙なのか、はっきりとした性格をも持っていない。このような「折楊柳」に新しい生命を注入するのは、そう難しいことではないだろう。「楊柳の枝を手折る」ことに意味づけさえすれば、あとはそのイメージに従って作辭すれば良いのである。果して、梁陳の文人は、漢代の人に「折柳贈別」と言う風習があったと信じて、一種の懐古趣味として、詩作をしたのだろうか。『三輔黄圖』の信憑性が疑われるとすれば、やはり、民間の風習に使われる楊柳の占い性、男女間の情愛の証としての役割の方が「折楊柳」の意味づけの際に、詩人にとって、より説得的、より刺激的だったのではないか。もっとも、宮体詩を好む文人達が、哀愁の念を掻き立てられたり、或いは哀愁の気分を詩に織りこむときに使ったりする素材として、楊柳の依々たる姿は、非常にうまく機能するのである。これも「折楊柳」の別れを伴うイメージがより強くなっていく大きな要素と見て間違いはないだろう。

折楊柳　江總

萬里音塵絶　萬里音塵絶ち
千條楊柳結　千條楊柳結ぶ

不悟倡園花　悟らず倡園の花
遙同天嶺雪　遙かに天嶺の雪と同じきを
春心自浩蕩　春心自ら浩蕩し
春樹聊攀折　春樹聊か攀折す
共此依依情　此の依々の情を共にするも
無奈年年別　年年の別れをいかんともするなし

この時代以降の作は、すべて右のように五言八句を成している。おそらく詠吟されはしたが、メロディーにのっては歌われなかったと思われる。

三

さて、詩の中の楊柳はどのように詠まれたのだろうか。

典故、用例の有無を重じることは、中国の文学作品の特色の一つである。生活の中でよく使われる成語、諺などの多くは、古の時代に源を求めることが出来る。詩語、素材なども勿論そうであるが、その源となるものは、往々にして、詩経である。楊柳の詩も詩経から見ることにしよう。

『詩經』に柳及び楊は九箇所出ている。

(1) 折柳樊圃　――　齊風
(2) 隰有楊　――　秦風

(3)東門之楊　｜　陳風
(4)楊柳依依　｜　小雅、采微
(5)北山有楊　｜　小雅、南山有臺
(6)汎汎楊舟　｜　小雅、菁菁者我、采菽
(7)苑彼柳斯　｜　小雅、小弁
(8)楊園之道　｜　小雅、巷伯
(9)有苑者柳　｜　小雅、菀柳

(1)は、柳で菜園のまがきを作るのは無駄であることを比喩している。(2)は、上句の「阪有桑」に続くことから考えると、陂地に桑を植え、湿地に楊を植えることが、各々その宜を得ていると言っているものと思われる。(3)は、男女の相会の場所をさしている。楊柳は相会の場所の目じるしであるが、白川静氏は「東門之楊」は歌垣の場所であろうと言っている(13)。(5)は、単なる北山に楊ありと言う叙景表現である。(6)の汎々楊舟は、舟のゆらゆらする様子から不安な気持を表わしているが、とくに楊柳そのものを言ってはいない。(7)には「鳴蜩嘒嘒」と言う句が続いているが、これがのち、柳と蟬との組合せの用法の濫觴となる。(8)の楊園は低い地の意味であるので、これはまた柳樹と無関係な用法である。(9)「有菀者柳」の菀は鬱倉と茂るの意で、この詩は茂々とした柳樹を言っている。つまり景色である。さて、問題は(4)であるが、その全文を先ず記しておこう。

昔我往矣　昔　我往きしとき
楊柳依依　楊柳依々たりき
今我来思　今　我来たる

雨雪霏霏　雪雨ふること霏霏たり
行道遲遲　道を行くこと遲遲たり
載渴載飢　載ち渴し載ち飢す
我心傷悲　我が心傷悲す
莫知我哀　我が哀を知る莫し

北方の国境に赴いた兵士が、任務を終え、故郷へ帰るときに歌ったものである。自分が旅立つとき、楊柳はしなだれる様子であった。今は帰途に就いているが、雪のために進むも思いに任せず、飢えと渴きとが、さらに追い打ちをかけてくる。故郷を懐しんでは痛む心の内を、誰ぞ知る人やあらんと言う、非常に素朴な歌である。この歌が後世に大きく影響を与える用法は二つある。一つは、楊柳が詩文に出る姿であって、いつも依々たるものであること。もう一つは、この歌が漂わせている哀情が、常に楊柳を借りて、のちの詩の表情をも醸し出していることである。実際、この詩の楊柳依依は単なる叙景であると言い切ることも出来る。自分が旅立つとき、柳に託して別れの情を惜しんだとはとても読めない。読めないけれども、すくなくともあの弱弱しげな柳のしだれるさまはきっと別れの悲しみを一層増したに違いはあるまい。『詩經』を読まない詩人はいたのだろうか。中国の詩人ならば、一度はこの別れのシーンを頭で覚え、そして、自分が親友と別れるはめになると、無意識にこのシーンを思い浮べ、自分の心境と重なり合わせることもあろう。

ところで、この楊柳はすぐに別離のテーマで活躍するようにはならないのである。『楚辞』には三箇所しか登場しない。

使梟楊先導兮　この梟楊は山神、すなわち狒狒のこと〈哀〉

哀枯楊之寃鸛　枯楊の樹にあることは、危殆に居ることを比喩している。〈歎怨〉
泣楊舟於會稽兮　楊舟はすなわち、詩經の汎々楊舟である。船のことを指す。〈歎遊〉

いずれも楊柳を素材として使ったものではないと言える。

逯欽立輯『先秦漢魏晉南北朝詩』の順で見ていくと、齊までの詩に柳はあまり出て来ないのである(14)。楊柳が登場する数少ない詩の中で、楊柳がただの景物として扱われるのがほとんどである。桃と対句の形で表現されたり、蟬と一緒に詠まれたりする。

歌　漢　張衡

浩浩陽春發　浩々として陽春発く
楊柳何依依　楊柳何ぞ依々たり
百鳥自南歸　百鳥　南より歸り
翺翔萃我枝　翺翔して我枝に萃(あつま)る

古詩十九首　無名氏

青青河畔草　青青たり　河畔の草
鬱鬱園中柳　鬱鬱たり　園中の柳
盈盈樓上女　盈盈たり　樓上の女
皎皎當牕牖　皎皎　窗牖に当る
娥娥紅粉粧　娥娥たり　紅粉の粧
纖纖出素手　纖纖　素手を出だす
昔為倡家女　昔は倡家の女たり

今為蕩子婦　今は蕩子の婦となる
蕩子行不歸　蕩子　行きて歸らず
空牀獨難守　空牀　獨り守ること難し

擬明月何皎々　晉　陸士衡

安寢北堂上　安らかに北堂の上に寢ぬれば
明月入我牖　明月　我が牖に入れり
照之有餘暉　照らしては餘りの暉有れど
攬之不盈手　攬らんとすれば手に盈たず
涼風繞曲房　涼風は曲房を繞り
寒蟬鳴高柳　寒蟬は高柳に鳴く
踟躕感節物　踟躕して節物に感ず
我行永已久　我の行は永く已に久し
游宦會無成　遊宦も成ること無かる會し
離思常難守　離の思ひは常しくは守り難し

詩　晉　司馬彪

秋節良可悲　秋節　良に悲しむべし
百華咸萎落　百華　咸　萎落す
堂前柳隨風　堂前　柳　風に隨ひ
疏林樹蕭索　疏林　樹　蕭索たり

右のように、全体として、感傷的で、悲しげに包まれる作品ばかりであるが、楊柳、すなわち別離と言うイメージを持っているものは皆無と言って良いのである。しかし、望郷、閨怨、悲秋などのような作品に、楊柳の存在がだんだん大切になってくるのである。楊柳には時の流れを感じさせてくれるのである。齊以降になると、別れのモチーフを持った楊柳がすこしずつ詩作の中に広がり始めたのである。

送別詩　　齊　劉繪

春満方解籜　　春満ちてまさに籜を解かんとせん
弱柳向低風　　弱柳　低風に向かふ
相思將安寄　　相思まさに安んぞ寄らんとす
悵望南飛鴻　　南に飛ぶ鴻を悵望す

送別詩　　梁　范雲

東風柳線長　　東風に柳線長く
送郎上河梁　　郎を送りて河梁に上る
未盡樽前酒　　未だ樽前の酒を尽さず
妾涙已千行　　妾が涙すでに千行となる
不愁書難寄　　書寄すること難きを愁へず
但恐鬢將霜　　但鬢まさに霜ならんとすを恐る
望懐白首約　　白首の約を望み懐いて
江上早歸航　　江上　早く歸航す

送別詩とは言っても、特に楊柳に「離情」を託したまでは読めないが、楊柳が別れを告げる際、必須の景物として、詩

に定着しつつあるとともに、その役割が浮き彫りにされて来たと言って良かろう。

自君之出矣　　梁　沈約

自君之出矣　君の出てたるより
楊柳正依依　楊柳まさに依依たり
君去無消息　君去りて消息なく
唯見黄鶴飛　唯　黄鶴の飛ぶをみる
關山多険阻　關山　険阻多く
士馬少光輝　士馬　光輝少し
流年無止極　流年　極めて止まる無く
君去何時歸　君が去りていつ歸らん

これは詩経の「昔我往矣、楊柳依依」が意識にあっての作であろう。この詩の中の楊柳は、単なる別れ際の一点景とも見えるが、それだけではないと思われる。同じく沈約の作で「翫庭柳詩」（『玉臺新詠』は詠柳となっている）と言うのがある。

輕陰拂建章、夾道連未央、因風結復解、
霑露柔且長、楚妃思欲絶、班女涙成行、
遊人未應去、為此還故鄉

「遊人未だまさに去るべからず、これが為に故郷へ歸らむ。」「此」は柳をさすことは言うまでもない。故里を離れると

き、柳に何か特別な意味を托したのではないかと思えてくる。それは、柳枝を贈別のしるしとしてもらったのだろうか。或いは、楊柳樹の下で、別れを告げて来たのだろうか。真相は不明であるが、楊柳を詩に織りこむこと自体、決して無意味ではないと思うのである。とすると、「自君之出矣」の楊柳も他の植物が取って代ることの出来ない存在であると言えよう。

春別　　蕭子顯

翻鶯度燕雙比翼　　翻鶯度燕　雙比翼
楊柳千條共一色　　楊柳千條　共に一色
但看陌上攜手歸　　但見る陌上手を携へて歸るを
誰能對此空相憶　　誰か能く此に對して空しく相憶はむ

この中の楊柳も、沈約のと同じモチーフであることは言うまでもない。

以上に述べて来たように、梁に入って、楊柳はこのようにしばしば離別詩に不可欠な景物として、登場するのである。唐代となれば、楊柳＝別離とまで常識化されてしまう。思うに、これは「折楊柳」と同じように民間の風習に刺激されたからであろう。横吹曲「折楊柳」の新しい曲辭がもたらしたイメージの定着が詩にも現れたのではなかろうか。一方、詩の形から見てもわかるように、時代が下るに連れ、句数が少なくなっていく。唐の絶句のようになると、字数が非常にすくなくなる。限られた字数の中で、詩人は感情を盛りこむのに、やはり人々が共感出来る象徴性の強い素材を使うのではないか。別離がテーマになると、悲しみを帯び、しかも深く人々の生活に根ざしている植物楊柳こそが、最も詩人たちの筆にのぼりやすかったのであろう。

結　語

楊柳の枝を手折って、旅に出る人に贈る。その理由について言及する人も少くない。八木沢元氏が「中国における送別の詩」(15)の一文に、諸説を整理した形で、柳留通音説、長相思説、綰還通音説、環還通音説、同心結説の五説を指摘した。要約すると、柳は留と同音であり、折柳はつまり留客という意味であるとするのが柳留通音説である。長相思説は、柳の長い枝に拠る考えであるが、永く故郷、或いは相手に寄せる思いを長い柳の枝に託して相手に贈ると言うのである。また、「綰柳條」の綰の古音は還と同じであるから、柳の枝を折りまげて、これを結び、人に贈れば、旅立つ人に対して、速還を祈る意味であると言う。さらに、柳の枝を環の形にするところから、釈清潭氏の「環は還なり」と言う環還通音説を取りあげている。同心結説について、八木沢氏は劉禹錫の楊柳枝詞の詩中にある「如今綰作(ムスビテ)同心結」という詩句がこれの根拠であると説いている。このように、多くの説が言われているが、いずれも、楊柳が別離の象徴とするイメージが定着したのちの詩作に基いている。これでは「折柳贈別」という風習の由来を説明してはいないと思われる。何故別れるとき、楊柳という植物が関係して来るのだろうか。どうして、折松、折竹、折梅などにならなかったのか。やはり、そこでは、楊柳が持つ信仰性に帰着せざるをえないのではないか。

旅、今でこそ生活の潤いと言われるようになったが、古代の人にとってみれば、それは大きな危険が伴い、旅に出ることは命がけだったと思われる。だから、故郷を離れることに大きな不安を感じ、ましては征役などのために出掛けるともなれば、祭祀せずにはいられまい。祭祀の記載は、古く周の時代まで溯ることが出来る。旅に出るとき、必ず「祖道」と言う祭祀を行い、送る人も、出立する人もその地で飲餞する風習があったのである。その祭祀の作法、使用する

道具などについて、ほとんどが不明である。だから、楊柳がどのような形で祭祀の儀式と関わったのかも当然不明である。不明ではあるけれども、楊柳は「祖道」の儀式作法が完備する以前から、最も素朴な形で、人々に使われたのではないかと思えてならないのである。つまり、旅の不安を感じる人にとっても、旅に出る人の安否を気遣う家族にとっても、神の加護を求めるのが祭祀の最も基本的な要求であり、そして、神が護ってくれる具体的な証として、身につけるのがお守りである。そのお守りとして、楊柳が使われたのではなかろうか。最も人々の目に触れやすい、しかも神の依り木でもあり、邪も払いのけてくれる(16)楊柳こそが旅の危険から守ってくれるのだと古代の人々はそう信じたのではないだろうか。我々は「折柳贈別」という風習を考えると、とかく一種のロマンチシズムを覚えやすい。文人が友人を渭水或いは灞橋のほとりまで送り、別れの盃を交わし、詩を吟じて相手に贈る。そして、思いを楊柳に託し、折って相手にあげて、別れを惜しむ。このような慣習は、実際行われたと思うが、人間はある程度生活の余裕がなければ、とてもこのように風流ぶることが出来ないであろう。旅に出ることは、古代人にしてみれば、生きるか死ぬかの戦いに出るのと同然、神の加護を祈るに、その真剣たるものは想像にあまりある。呪文を唱えながら、楊柳を手折り、旅に出る人の身につけさせる風景、それは神に一途にすがる古代人の姿でもあり、これこそが「折柳贈別」の源ではないだろうか。そして、このような信仰に基く風習が長きに亘り、拡りをもって脈々と引き継がれていくうちに、文人の感性に響くところがあって、筆に登り、やがて、ロマンチックな別離の象徴として取りあげられるようになったのではあるまいか。

[注]

(1) 楊柳小考——柳の民俗、中日比較の視点から——『藝文研究』昭和六一年、第五十号。

(2) 植物的考察について、鍾玲氏の「先秦文學中楊柳的象徴意義」の第一節に詳しく論じられている。中国古典文学研究会主

編、『古典文学』第七集上冊、一九八五年八月、台灣学生書局。

(3) 賈公彦の疏では喪大記を引いて、柳は帷荒であるとしている。

(4) 説文解字段玉裁注、「按度西日柳穀、今文尚書也。宅西日昧谷者、後鄭所読之古文尚書也。」

(5) 注(2)鍾玲氏の論文に引く黄永武氏の説によれば、日没の時刻は酉時(午後五時から七時)であり、酉の古音は留、柳と同音であるので、柳樹や折柳と日没とは深い関係があると言う。

(6) 注(1)を参照。

(7) 柳が別離の象徴になった思想的根源は柳樹信仰であることについて、王孝廉氏の「神話與詩」も同じ考えを示している。しかし、氏は、詩人たちにとって、柳樹信仰は消極的な触発であり、むしろ、柳が別離の象徴になったのは、詩人たちが柳の持つ聚である意味を積極的に詩意化したからだと推測している。この推測には疑問を感じる。「神話與詩」は王孝廉著、『中國的神話與傳説』に見える。一九七七年、台北聯經出版事業公司。

(8) 楽府折楊柳とは別に、「折楊」と言う俗曲は古くからあるものである。『荘子』天地篇に「大聲不入於里耳。折楊皇荂則嗑然而笑。」とある。これとのちに六朝時代に流行した同名の俗曲とはどのような関連があるのか不明である。

(9) 折楊柳の曲名と題意と関連について、歴史的に考察した論文は増田清彦氏の「南朝人作の横吹曲」第三節「折揚柳」(増田清彦著『楽府の歴史的研究』昭和五十年、創文社)と岡田貞雄氏の「折楊柳考」(支那学研究、第十七号、昭和三二年)がある。

(10) その他五首は『楽府詩集』巻三十七に見る。

(11) 注(8)の増田氏論文第一節「曲辞の制作年代」。

(12) 注(8)の論文の総論。

(13) 白川静著『詩経』六七頁、中公新書、昭和四五年。

(14) 柳を詠む賦は少なくないが、いずれも別離とは無関係である。

(15) 八木沢元著『霞城之春―中国文学論集』明治書院、昭和五六年。

(16) 楊柳に対する信仰について詳しくは注(1)の「楊柳小考」を参照されたい。